

ISSN 0910-2396

# 野鳥だより

—北海道—

北海道野鳥だより第164号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成23年6月21日

クマタカ



2010. 11. 30 豊浦町貫気別川

撮影者 篠原盛雄 (伊達市)



も く じ

私の探鳥地(59) 軽川・前田公園周辺 (札幌市手稲区前田)

	札幌市手稲区 坂井 伍一	.....	2
図鑑の間違い	美唄市 藤巻 裕蔵	.....	4
最近の長流川周辺の野鳥報告			
	日本野鳥の会室蘭支部長 篠原 盛雄	.....	5
野鳥お勉強会と人と鳥と…	江別市 富川 徹	.....	8
ワキアカツグミ観察記録	札幌市西区 渡邊 智子	.....	11
平成23年度総会報告		.....	12
探鳥会ほうこく		.....	13
探鳥会あんない		.....	16
鳥民だより		.....	16

私の探鳥地 (59) <sup>がるがわ</sup> 軽川・前田公園周辺 (札幌市手稲区前田)  
札幌市手稲区 坂井 伍一

平成19年4月、定年退職により札幌市手稲区に住むこととなり、健康のために自宅近くの軽川に出かけるようになりました。軽川は自宅から歩いて5分ほどのところにあり、住宅街を流れる川幅2m程度の小さな川で、両岸に高さ8mくらいの堤防が敷設され、その上に遊歩道が整備されており、区民の散歩道として利用されています。ここは、「軽川桜づつみ」の名称がつけられ、春には満開の桜が咲き誇っています。堤防と堤防の間は40mほどで、軽川と中の川の合流点は三角州になっています。

私の探鳥路は、稲山橋から堤防道路を歩き、砂山橋を渡って左に折れると、東屋に着きます。ここまで約500m

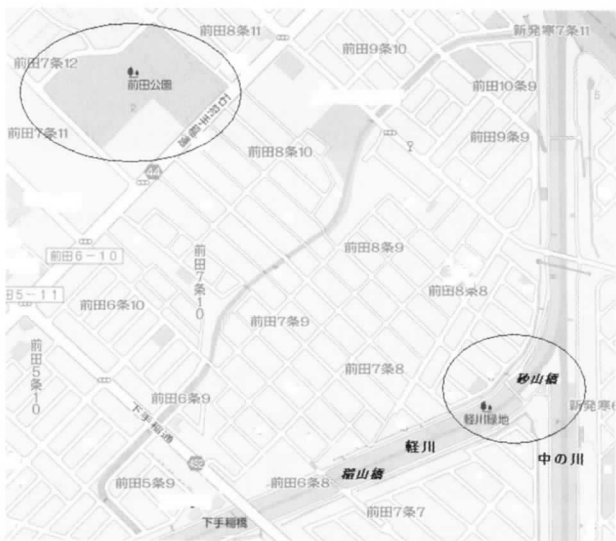
ほどの距離です。この場所からは、中の川との合流点三角州が一望できます。手前はヨシ原になっており、河畔



軽川にやってきたカワセミ '09. 4. 24

には大きな柳の木が密生しています。ここでの鳥見は雪解けから子育てが終わるまでの4月から8月頃までとなります。

4月、まだ寒いですが、東屋の前の堤防の上に腰掛けしていると、川面をチーッと鳴きながらカワセミがやってきます。ヨシ原の低木には、オオヨシキリが朝早くから大きな声でギョギョシ、ギョギョシと囀り始めます。アオジ、ノビタキも負けじと囀っています。少し時期をおいて、姿を見せることはあまりありませんが、エゾセンニュウがトッピンカケタカと鳴き始めます。特にオオヨシキリの数が多く、あちこちで競い合って鳴いています。



軽川・前田公園周辺地図

不思議なことにこの場所ではコヨシキリを見ることはありません。アリスイも番で見られ、柳の木などに止まってキィーキィキィ鳴いている姿を見ることができます。三角州は、夏鳥が渡ってきたときの一時的な休息場と



三角州で囀るオオヨシキリ '08. 5. 8

なっているようでルリビタキ、ベニマシコ、コルリ、メジロなどを見ることがあります。

水鳥では、マガモ、コガモ、カルガモ、アオサギなどを見ることができ、稀にコサギ、ゴイサギがやってくることもあります。他にはモズ、コムクドリ、ホオアカ、カッコウ、アカゲラ、コゲラ、シメ、キセキレイなどを見ることができ、また、上空をハヤブサなどの猛禽類が飛ぶこともあります

軽川と中の川には、キジ(コウライキジ)が棲みついているようで、散歩する人が多い堤防の上を悠々と歩く姿が目撃されます。時には番で、また子連れで歩く姿を見ることがあります。軽川堤防の遊歩道は、日の出から日没までウォーキング、ジョギング、犬の散歩などで人通りが絶えません。よって、大勢での鳥見には不向で4~5人の少人数グループで散策しながらのウォッチン



堤防法面にあらわれたキジの番 '08. 6. 18

グが適当な場所です。また、河畔では多くの鳥達が生活していることから、鳥達を脅かすことのないように、堤防の上からの観察を心がけるようにしています。これま



松の実を採餌するイスカ '11. 2. 9

でに私が確認した種類は、40種を越えています。

砂山橋から800mほど西よりに、もうひとつの探鳥地「前田公園」があります。ここは周囲1kmに満たない小さな都市公園です。周りに白樺が植えられ、公園内には松が多く、テニスコート、野球場も整備されている区民の憩いの場になっているところです。

この公園にはヤマガラ、シジュウカラ、ヒガラなどのカラ類、アカゲラなどを通年見ることができますが、メ



白樺の種子を採餌するベニヒワ '09. 1. 1

インは冬期間です。松の木が多いこともあり、イスカの群れがやってきます。多いときには50~60羽の群れが松の実を採餌しています。ちなみに今年は2月初めから1ヶ月以上にわたって観察することができました。また、白樺が多いことから、ベニヒワがやってきます。平成21年には100羽以上の群れが白樺の種子を食べにきていました。ナナカマドの木も多く、ツグミやシメの群、レンジャクもやってきます。キクイタダキ、カシラダカ、イカル、キバシリを見ることがあります。冬期間、公園内は除雪されていませんので、雪をラッセルしながら歩くことが多くなります。

また、軽川も同様ですが、住宅街の中にある場所ですので、他人に迷惑がかからない様十分に配慮しながら鳥見をすることが肝要です。

## 図鑑の間違い

美唄市 藤巻裕蔵

私たちは野外で鳥を観察するさいによく図鑑を見ることがありますが、図鑑に書かれていることは正しいという前提のもとに使っています。古い図鑑では、標本を見て絵を描いていたこともありますので、全体の形が実際とは少し違うとか、色が生きてるときと違っているということがありました。しかし、最近では絵の代わりに写真を用いたり、観察歴が長く野外識別のベテランが執筆していますので、古い図鑑に見られるような問題はまずないでしょう。しかし「弘法も筆の誤り」で、図鑑や百科事典などの中には間違っていたり、不適切な記述があり、100%正しいとは言えない場合が少なくありません。

いくつか例を挙げてみましょう。私は長年エゾライチョウを対象として調査・研究してきましたので、まずはエゾライチョウについてです。「世界の動物・分類と飼育(10) I キジ目」(東京動物園協会)のエゾライチョウの解説の中で『趾先まで羽毛で覆われています』とあります。また「日本の野鳥590」(平凡社)のエゾライチョウの説明の中で、『雌雄をとわず、夏・冬羽ともに足指の部分まで白い羽毛があり』とあります。エゾライチョウには夏はもちろん、冬にも足指に羽毛はありません。冬には<sup>①</sup>趾しょ部分の羽毛が長くなるだけです。ただ足指の左右には扁平な突起があり、これが積雪の上ではかんじきの役割をするのでしょう。この図鑑の記述は明らかにエゾライチョウと本州に生息するライチョウとを混同しています。前者は黒田長久・森岡弘之という鳥類学の大家の監修ですが、このような間違いがあります。後者の著者はおそらくエゾライチョウを直接観察したり、標本を見たことがなく、先人の著書を引用したのでしょう。次は日本野鳥の会の「フィールドガイド日本の野鳥」です。やはりエゾライチョウの説明の中で『足には白い羽毛が生えている』とあります。しかしこの図鑑の最初にある「鳥の各部の名称」には「足指」と「<sup>②</sup>趾しょ」はありますが、「足」がなく、足がどの部分を指すのかがはっきりしません。これは間違いではないとしても不適切な記述といえるでしょう。このフィールドガイドは、識別の大家といわれる高野伸二さんの執筆なのです。

また生態についても『主に針葉樹林に生息』(「日本の野鳥」、山と溪谷社)、『夏は常に♂♀で生活し』(「日本鳥類大図鑑」、講談社)、『家族群で周年すごす』(「鳥630図鑑」、日本鳥類保護連盟)などがあります。これまでの私の調査結果では、カラマツ人工林以外であればどのタイプの森林にも生息しています。この鳥の冬の食物

は落葉広葉樹の冬芽や尾状花序なので、冬には針葉樹だけの森林では生活できません。またエゾライチョウは産卵までは雌雄が一緒にいるところがよく観察されますが、5月中・下旬に抱卵が始まると雄は単独生活となります。6月中旬を過ぎると、雌と小さな幼鳥の群れがよく見られますが、これに雄と一緒にいることはありません。また広い野外飼育施設で観察していても、抱卵が始まると雄はまったく雌に関心を示さなくなり、雛が孵化してもそれに付き添うような行動は一切見せません。雌と幼鳥の家族群が見られるのは、8月中・下旬までです。しかし、この時期に幼鳥は親と同じ大きさになっているので、家族群か家族以外の個体と群れをつくっているのかの判別は無理でしょう。その後秋には単独になることが多く、冬になると数羽の群れとなります。これらのことから、上述の説明が間違いであることは明らかです。

他の種の例としてキバシリをあげてみましょう。この鳥の生息環境について『平地から山地の針葉樹林、針広混交林』(「北海道野鳥図鑑」、亜璃西社 2003)となっています。しかし、私が北海道中央部・南東部で調査した結果によると、出現率は常緑針葉樹林で53%、針広混交林で29%、落葉広葉樹林で40%でした。一般に受ける感じとしてキバシリは針葉樹との結びつきの強い鳥という印象がありますが、実際には落葉広葉樹林にも他のタイプの森林と同様に生息しています。私のこれまでの経験でも、野外観察から受ける「感じ」と実際に調査データをまとめた結果とが食い違うことが何回かありました。したがって、図鑑類での記述ではできるだけ具体的なデータに基づくべきでしょう。話は変わりますが、野外観察からうける「感じ」と蓄積したデータから出てきた結果との食い違いが明らかになる「意外性」も、論文をまとめるときの楽しみの一つなのです。

野外では自分の目で鳥をじっくりと観察し、図鑑に書いてあるのとは違うぞといった発見の楽しみを味わってはいかがでしょうか。



## 最近の長流川周辺の野鳥報告

日本野鳥の会室蘭支部長 篠原盛雄

私が野鳥観察を始めて15年になります。それまで全く鳥には関心が無い私でしたが、末の子の自由研究のお手伝いで長流川へ白鳥の観察に行ったのが野鳥観察のはじまりでした。

長流川は河口から2kmにわたって護岸がすっかりコンクリート化され自然状態が最悪の状態でしたが子どものお付き合いで仕方なく行ってみると白鳥だけではなく、いろいろな鳥がいるではありませんか。それではと、泥縄式に双眼鏡を購入し、図鑑をそろえ、ついにはフィールドスコープまで買いに走り、フィールドノートに記録をつけ始めると、いつしかそれが私の仕事と化してしまいました。人工物で覆われ、すっかり自然が無くなってしまったように見えた長流川になぜこんなに野鳥がやってくるのか、観察に行くたびに新たな発見の連続で、すっかり野鳥観察の虜になってしまいました。観察記録をつけ続ける中で、長流川の自然度のレベル、長流川の果たしている生態系での役割の重要性を再認識してきました。それまで長流川は狩猟区でしたので、自由にカモ猟が行われていました。野鳥観察を地域全体に広げて調査していく中で、地域に残された自然は非常に限られてしまっており、カモたちが越冬するところは長流川しか残されていませんでした。近年生物多様性が叫ばれる中、地域の生態系を守っていくために長流川自然保護地域の設定の働きかけを道、伊達市にしました。その後猟友会との話し合いがもたれ、とりあえず自主規制で発砲禁止となり、やっと長流川が冬鳥の安全な越冬地となることができました。その後も観察を続けてきて、長流川の特に河口部が野鳥の生息にとって重要であることがますます明らかになってきました。今後、河口部分の自然再生事業の可能性を追求していきたいと考えています。

長流川は全長50kmの内浦湾に注ぐ最大の河川です。河口を南に開き、人工物で河口部分は狭められましたが干潟、砂州、砂浜、海岸部分の草原、防風林、河畔林、工場跡の森林、河口周辺の田んぼ、畑等狭いながら自然の多様性に富んでいます。

15年間に長流川周辺で観察された野鳥は246種にのぼり、そのうちシギ・チドリは44種になりますので、その結果から野鳥にとって長流川は西胆振での重要な繁殖地、越冬地、中継地となっていることが分かります。

長流川での飛来数の少ない野鳥を表でまとめますと表1のようになります。北海道のほかの地域とくらべて伊達市は地理的な条件で積雪が少なく、温暖で気候に恵まれています。また有珠山をはじめ火山活動によって多様な自然が

形成されており、鳥の渡りのルートとなっているところから、越冬期と春・秋の渡りの時期に特にさまざまな野鳥を観察することができます。

### <今シーズン越冬期>

10月ころからガン・カモの類が順次越冬にやってきましたが、1999年から始まったマガンの越冬は途切れることなく続いています。「C2Y」の標識マガンは2006年から4年間飛来しましたが今シーズンは確認できませんでした。今シーズンも130羽を超えるマガンが越冬しましたが近年、12月末に伊達でも大雪となることが多く積雪30cmを超えると田んぼでのマガンの採食が困難となり、昨シーズンはいつもの場所から姿を消してしまい、伊達近辺をくまなく探しやっと別の越冬場所を確認しました。今シーズンも12月末から大雪の後、昨シーズン同様に風が強く雪が飛ばされる麦畑を越冬地を選んでいました。マガンたちは吹雪の中を丸くなり、じっと耐えて冬を乗り切っていました。今年の1月、そのマガンの群れの中に「コクガン」が1羽混じって麦や牧草を食していました。昨年12月末まで気温が高く海水温も高かったせいか、1月になってもノリなどの海藻の成長が遅い状態でしたのでやむなく陸上の草を食していたのかもしれませんが。海にいるコクガンが草を食しているのには驚きました。地球温暖化がいわれて久しくマガンの越冬もその一つの現れともとらえられていますが、伊達でも1月11日に「トラツグミ」がツルウメモドキの実をツグミと一緒に食しているのが観察されました。2010年12月29日自宅の庭にスズメと一緒に「アオジ」が現れたりして驚きました。今後、今まで越冬しなかった鳥が観察されることが多くなるのかもしれませんが。伊達ではマガンと一緒に田んぼでミヤマガラスとコクマルガラスが越冬していますが、今シーズンコクマルガラスは19羽の群れ



ホシムクドリ (右)、左はムクドリ

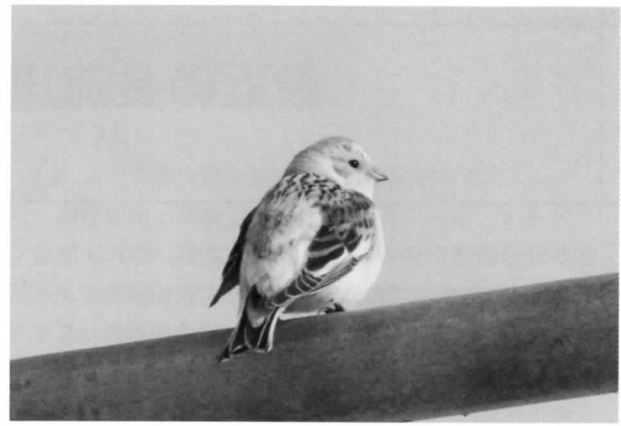


表1 長流川での飛来数の少ない野鳥

種名	数	飛来年月日
コグンカンドリ	1	2005年7月28日
サンカノゴイ	1	2006年4月11日
ヘラサギ	1	2005年9月9日
カラシラサギ	1	2009年7月11日
	1	2004年5月14日~15日
	1	2001年8月10日~18日
	1	1999年8月5日~14日
ツクシガモ(♂)	1	1998年3月30日
クビワキンクロ(♀)	1	2006年6月17日~18日
オオホシハジロ	1	2001年10月23日~30日
	1	2001年3月15日~18日
	3	1998年12月8日~1999年5月19日
メジロガモ(♂)	1	2009年5月25日~6月8日
ヒメハジロ(♀)	1	2003年3月15日~4月26日
マナヅル	1	2006年10月9日~12日
ミヤコドリ	1	2006年10月8日~9日
	1	2001年10月1日
ハジロコチドリ	1	2006年8月30日
ヒメウズラシギ	1	2004年8月15日
ダイシャクシギ	1	2011年3月24日
	1	2010年4月2日
	1	2003年4月27日
セイタカシギ	1	15年間に6回観察
ツバメチドリ	1	1998年5月2日~5日
トウゾクカモメ	1	2001年8月6日
クロハラアジサシ	1	2006年8月20日
ハジロクロハラアジサシ	1	2006年10月9日
コアカゲラ(♀)	1	1997年1月19日
コシアカツバメ	1	2005年5月19日
シベリアツメナガセキレイ	1	2007年5月19日
マミジロツメナガセキレイ	1	2003年5月13日
	1	1999年5月29日
アカモズ	1	1999年8月21日
アカモズ(♂,♀)	各1	1997年5月25日
オオモズ	1	1997年2月15日
シラガホオジロ	4	2011年2月10日~3月5日
	32	2007年2月3日
	8	2006年1月15日~18日
	47	2005年1月29日~31日
	6	1997年3月25日
ユキホオジロ	1	2011年2月10日~13日
	15	1997年2月28日
ツメナガホオジロ	50±	2000年12月25日
ホシムクドリ	1	2011年2月20日

有珠海岸

種名	数	飛来年月日
ヘラシギ	1	2010年9月5日
ミヤコドリ	1	2006年9月30日
ヨーロッパトウネン	1	2004年8月29日
クロトウゾクカモメ	1	2002年9月29日
オオカラモズ	1	1999年12月28日~2000年1月5日



ユキホオジロ

でやってきました。今まで多くて数羽でしたので、20近い群れは初めてのことでした。また昨年秋に見かけたコハクチョウ2羽も長流川でオオハクチョウたちと完全越冬しました。昨年より雪が少なかったので2月10日に車で長流川河口東側へ入り観察しましたら、なんとシラガホオジロが4羽とユキホオジロが1羽いました。この2、3年で河口の砂浜に増えたハマニンニクの種を盛んに食していました。シラガホオジロはその後も同じ場所で3月5日まで観察することができました。そのさなか2月20日に5羽のムクドリの中に「ホシムクドリ」が1羽紛れていてとっさに証拠写真を撮ることができました。そして3月24日長流川河口にダイシャクシギが1羽やってきました。長流川河口での観察は15年の間で3回目です。昨年に続けての飛来ですので同じ個体なのかもしれません。以前、左足が奇形のチュウシャクシギが同じ場所に連続して飛来した例がありますので鳥は意外に同じコースをたどって生活しているのかもしれません。気候変動のせいか近年気圧配置がずれています。高気圧、低気圧の配置が微妙にずれるため風の方向が違ってきています。それは伊達において積雪の変化となって現れます。越冬の鳥たちに微妙な影響を与えています。また例年2月から3月にかけての低気圧の暴風雨によって、南のカモたちが風によってやってきますが、今年はその風もなく長流川河口のオナガガモの飛来は極端に少なかったです。



ダイシャクシギ



ヘラシギ

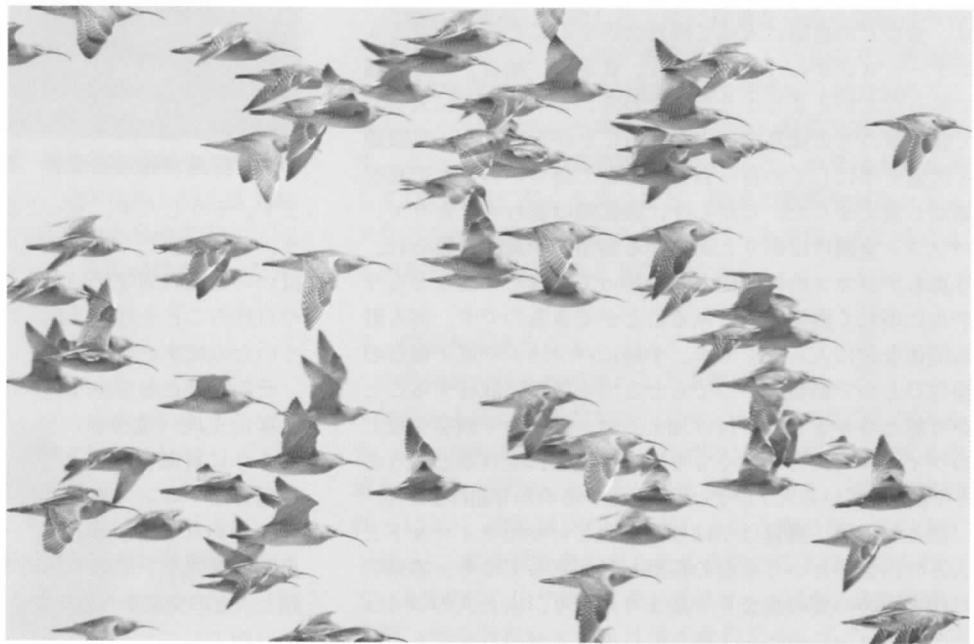
<最近の渡りのシーズン>

伊達は西胆振で唯一のシギ・チドリの中継地となっています。干潟の規模が小さいため数的にはさびしいですが、長流川河口の淡水性のシギ、河口の干潟の海岸性のシギ・チドリ、有珠海岸の海岸性のシギとさまざまなシギ・チドリを観察することができます。

2010年9月4日には有珠海岸で15年間待ちに待った「ヘラシギ」をトウネンの中に見つけることができました。さらに9月10日には「サルハマシギ」が数羽のトウネンの中にいました。特に2010年5月21日は忘れることのできない光景にめぐり合うことができました。チュウシャクシギの大群での飛来です。仕事の空きができ休みを取ってお昼頃長流川河口に出かけると何やら河口付近を鳥の群れが飛び交っています。近づいてみるとチュウシャクシギの大群でした。しばらくすると河口の干潟に舞い降りてきました。ざっと数え  
ると250羽の群れでした。前年有珠のアルトリ岬で、上空を110羽のチュウシャクシギの群れが通過するのを見て感激しましたが、それをはるかに超える大群に目を疑いました。しかしよく観察するとその中にオオソリハシシギ25羽、ハウロクシギ4羽、トウネン3羽、メダイチドリ4羽が混じっていました。時々飛び立ち河口上空を旋回して再び舞い降りてくるのですが驚いたことに私の車の上を通りすぎる時に鳥の群れで日陰ができるのです。1時間ほどして海岸沿いを東の方向へ飛び去る姿を双眼鏡で確認をしているとなんと上空でもう一つの同じくらいの群れが合流するで

はありませんか、約500羽のチュウシャクシギを中心とした群れが長流川上空を旋回しました。チュウシャクシギの伊達での飛来は一度に20数羽程度でしたので、これは忘れられない光景となりました。大群が東の方向へ飛び去った後、有珠のアルトリ岬（長流川から西へ3km）へ念のため行ってみましたら岬の沖の小島になんとチュウシャクシギ約200羽、オオソリハシシギ5羽、キアシシギ4羽、キョウジョシギ1羽が休んでいました。

その日は700を超えるシギが伊達に飛来したのです。野鳥観察は地球の生命の脈をとっているようなものです。地球の命の営みに触れて感銘を受けました。15年間通い続けて初めての経験ですので、いつもこんなシーンにめぐり合うとはいきませんが伊達では春4月下旬から5月下旬まで、秋は8月下旬から9月下旬がシギ・チドリの渡りのシーズンとなっています。機会がありましたら覗いてみてください。現在日本は東日本大震災、おまけに原発事故と大変な状況となっています。自然災害で多くの尊い人命が失われ、さらに原発事故という人災で多くの人々が故郷を追いだされて、事故処理のために懸命な作業が命がけで行われています。そのさなか環境省は4月21日、原発に変



チュウシャクシギの大群

わるエネルギーとして風力発電の可能性を発表しました。なんと原発40基分と試算しています。風車建設の環境に対する負荷が問題視されている現在、狭い日本、また渡りのコースである日本にどれほどの風車を建てる余地があるのでしょうか。環境省ともあろうものが、自然の生態系を守り生物多様性を守るという役割を全く投げ捨てた発言には開いた口がふさがりませんでした。自然を守っていくという立場が、人々の暮らしを支えています。野鳥を観察しながらつくづく日本の社会の在り方を考えさせられました。

# 野鳥お勉強会と人と鳥と・・・

江別市 富川 徹

## 1. 鳥見の昔と今

いきなり暗い話ですみません。北海道野鳥愛護会（以下、「愛護会」という）の会員数ですが、昨今、高齢の理由及び会費未納による退会に加え、新会員の入会者も少なく会員数の減少傾向がみられます。特に若い人の入会がほとんどないことで平均年齢は増々高くなるばかりです。これは会を維持運営するうえで極めて大きな痛手であり深刻な問題として捉えなければなりません。今さらではありませんが、会の維持存続のために何らかの方策を検討せねばならないとも思います。傍からみると“鳥好きなおじさんとおばさんの集団”、“中高年のウォッチングツアーのご一行”を呈している感は否めないでしょう。他方、会員減の悩みを持つのは他の野鳥関係及び自然団体などでも同様の傾向にあり、現代社会を象徴する時代変化ともうかがえますが、何か“社会のゆがみ”みたいなものを感じます。

昨今ではインターネットやメディア等の大幅な普及で情報が飛び交い、例えば鳥を覚えたいということで少し前では、会などの組織に入って探鳥会等を通じた人とのコミュニケーションから「教えられる、覚える、知る」のが普通であったといえましょう。すなわち、まず会などに入会して諸先輩たちと探鳥会に出かけることから始まり、双眼鏡と図鑑を手にしての首っ引き、そして語らいのなかで鳥を識別し覚えました。しかし今、図鑑類は溢れんばかりで、パソコンを開けばありとあらゆる鳥情報が瞬時に得られ、写真もデジカメの性能向上が相俟って、珍しい鳥などもリアルに美しく画像としてみるができるのです。何も野鳥団体などに入らなくても、手軽にパソコンや電子機器の操作ひとつで情報はいつでもどこでも簡単に取得することが可能となりました。付け加えると、探鳥会や観察会などのフィールドに行かなくても探鳥会気分になれるということで満足している人がひよっとするといえるのかも知れません。

私としては、鳥見はやはり探鳥会といったフィールドと人との出会いという生身の接触行動があってこそ、本来の目指すものの質の高まりや深まりがあり、人と人のコミュニケーションの中から人間らしさの営みが得られるものと信じています。少し堅苦しくなりましたが、まさに探鳥会は人と人のコミュニケーションそのものであり、その存在意義は極めて大きいものと思っています。

“鳥仲間と一緒に探鳥し鳥を語ることはとても楽しい”ことです。このことは若い人を含めこれから鳥を覚えたい、関心がある人たちにも基本的には理解してもらえらるることだと確信しています。愛護会の会員としても、今一度探鳥会を通じて会活動を再確認しておくことが重要であると考えています。

## 2. 野鳥お勉強会の誕生まで

私の主宰する野鳥お勉強会（以下、「お勉強会」という）

は、1987年（昭和62年）にスタートした会です。当時は自然ブームが定着化し自然環境や自然保護という言葉が聞かれて久しい頃で、関係の団体はにぎわいと活気に満ちていたように思い出されます。また、世では自然や環境に関するシンポジウムやイベントも数多く催され、特に環境分野への高揚がありました。しかし、講演会の聴講では、どちらかというところ“聞かされる”というやや一方通行的なパターンが主流で、質問や意見も一般的かつ単純な質問などを言うには躊躇するような雰囲気は漂っていたと記憶し



野鳥お勉強会風景 朝日新聞 '05. 2. 2より

ます。そうした中、もっと身近なことを自由に語り話し合う、そして楽しく情報交流のできる場としてサロンがあればいいと個人的な想いがありました。まさしく「好きな鳥や自然のことを仲間と楽しく語り合える場」の創出を描いていたのです。

その背景として少し遡りますが、鉄腕アトム原作者の手塚治虫氏（漫画家）が、「人の意思の交流が新しい社会づくりに貢献する」として、「人の出会いの場」づくりを目指したサロン「集」をつくっていたことに豪く感動したことがあります。ゆえに、それらの考えを土台に、「鳥や自然の疑問や不思議を解消する場につなげる」、「身近な話題と人との交流から人的なネットワークの構築（会員獲得）を目指す」ことを我々もやってみようかと考えたのです。そんなことを何気なく当時の愛護会の柳沢信雄副会長に話すと、「それはいいことだ！」と話が弾む形で、いつも幹事会後などに必ずや寄っている居酒屋（当時「夢二亭」）の店主に相談すると、時世（週休二日制による土曜日休、ビル街のサラリーマンが来なく売上げに困っていた。そのため開催は歓迎され貸切可能となる。）があつてすぐに意気投合となり、とんとん拍子に会の発足へと至ったのです。

## 3. “常連組”は愛護会の皆さん

お勉強会は、月1回、今は第三土曜日（当初は第二土曜日）、会場は概ね居酒屋で行っています。また、地方開催（札幌以外の地域）も行っており、最近では「野鳥お勉強会in



帯広(2010.11)、「野鳥お勉強会in旭川 外来種ワークショップ(2007.9)」があります。

お勉強会の「お」は「あまり堅苦しくなくざっくばらんに」ということの意味合いがあります。会場は地方開催などを除くと大半が居酒屋で、お酒のある飲食を伴う設定(宴会形式)で行われます。今日まで長年に渡って会が存続しているのも、ある意味で「お酒のおかげ」と言ってもいいのでしょうか…。でも、「勉強会なのにお酒を飲みながらなんてだらしない、不謹慎、不真面目、のんべえ会」などと周りからお叱りを受けそうな言葉が返ってきそうですが、不思議にそんな不評などはこれまでほとんどありません。話題を発表する講師や参加者の人柄は勿論ですが、テーマや内容等はどれをとっても「真面目」そのもので、「お酒の力を借りて」ではないですが、各々の講師の話題や関心事をダイレクトに熱く語る姿勢、自由に交流する場の存在ということでは、他の会にはないものとして自負できるものと受け止めています。

お勉強会の開催回数は1987年の第1回開催から今年2011年1月で第283回を数えます。このうち、参加者数については54回までの参加者が不明なために、ここでは都合それらを省き整理しますが、55回から今年1月の283回までの228回の開催で、この間の参加者数は3,291人、平均では14.3人/回という数字になります。平均人数が出たので単純に第1回から54回までに当てはめてみると770人とみることができ、これまでのお勉強会の全参加者を推測してみると述べ4,000人を超える数になります。また、55回以降は、参加記録をとっていますので内容実績などの分析もある程度は可能です。ですから、公表は差し控えますが一人ひとりの参加回数なども分かるというものです。

参加実績についてみると(図1)、参加回数がたった1

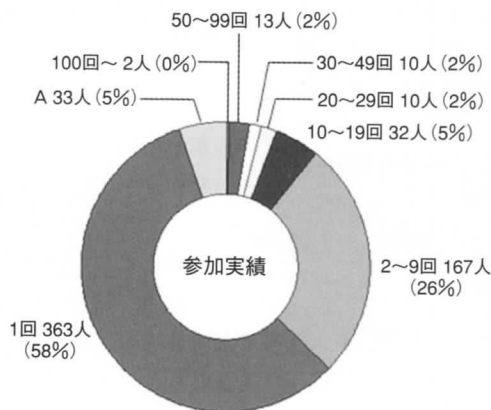


図1 参加実績  
 ※1. 229開催(第55~283回) 延べ参加者3,291人  
 ※2. 図中Aは54回開催以前

回というのは363人(58%)、2~9回は167人(26%)となり、全参加者の630人に対して、大半が1回もしくは10回に満たない“低参加組”となっており、リピーターの少ない残念な結果であることも隠せません。こうしてみると、都合の整理ですが“時々参加組”の10~29回は計42人(7%)で、“常連組”といえそうな30回以上はわず

か25人(4%)とさみしいものとなっています。

次に、講師についてみると、複数回を担当された講師もいますが、相対的に発表時の職業で整理すると、会社員が64人(22%)と最も多く、次いで公務員45人(16%)、自然団体会員43人(15%)、大学院・学生40人(14%)の順となり、以下の大学教授や学校教師、団体・研究職員などの専門的な立場となる先生及び研究者を上回っているというおもしろい結果が得られました(図2)。

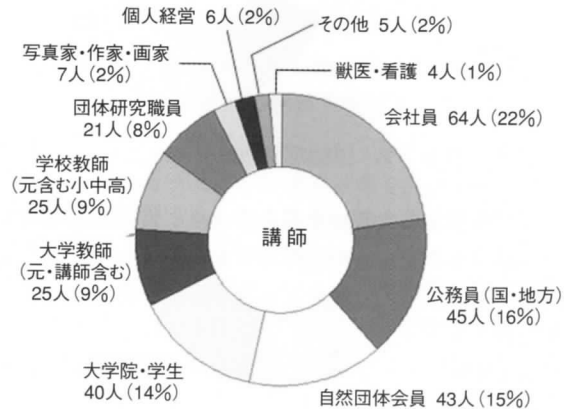


図2 講師(283開催中285テーマより)

この会の講師は、概ね自主的に得意な分野や話題について熱弁を振るうというのが基本となっているので、参加者も身近な会話で納得のいく議論ができるという魅力があり、他のシンポジウムや講演会などにない特徴を有しています。また、そうした講師陣を振り返ると、中では本会を通じて自然環境に関心を持つなど、関連の職業やボランティアなどの各方面で活躍されるメンバーを排出していることも少なからず自負できることです。

#### 4. 語られてきたこと

お勉強会で語られてきたことを整理します。

気になる話の内容ですが、ジャンルとして区分してみると、やはり野鳥お勉強会というだけに「鳥類」に関する内容が163件(57%)と最も多く6割近くあり、海外探訪32件(12%)、哺乳類18件(6%)という順となっています(図3)。本会は野鳥のみならず自然のことは何でも行っていますので、山や地形、魚、ザリガニ、昆虫、自然保護、植物、その他とジャンルは様々なのです。もちろんパンディングの話のほか、海外の野鳥バージョンという非日常的なところでの貴重な体験や珍しい鳥の話、観察テクニクの話、そして北海道の代表種であるヒグマ、エゾシカに、最近では希少なコウモリや外来生物アライグマの分布・生態などの哺乳類の話も人気です。

一方、その他の分野としては、「飛翔に憧れて」や「鉄の鳥と環境破壊」といった現代の航空機の話、「地球にやさしい土の話」、「廃棄物対策の現状と課題」、「遺跡調査からの自然情報」、「恐竜発掘体験」、「蘭学事始め(オランダの環境の取り組み)」、「地域活性化の話」など、身近な環境に関わっての興味ある内容ですが、新鮮な気分で聞き入れるものでした。加えて、「熱き“鳥”を語る講師たち」

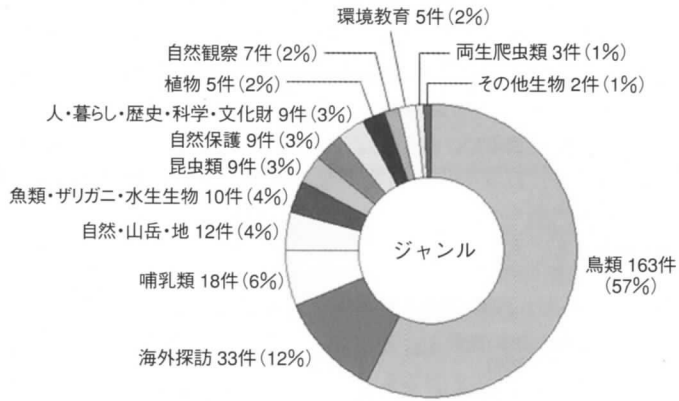


図3 ジャンル (283開催285テーマより)

と題して自ら参加した想いを自らのメモと講師の似顔絵で振り返る話でしたが、この会は何でも話題にしてしまうというのも会ならではの、おおいに盛り上がりました。

鳥類に関する開催内容では、3つのキーワードをあげて分類をしてみると、「種」、「記録・分布」、「生態・行動」、「地域」など、“鳥について多角的にいろいろと知りたい”というものに関わり、特に北海道という地域特性、種、生活、生息状況といった内容が目を引きまます(図4)。また、テーマで多い鳥種(類)としては、猛禽類が最も多いほか、アオサギ、カラス、マガン、フクロウ類、海鳥、カモ類、タンチョウ、クマガラの話題も比較的多く語られています

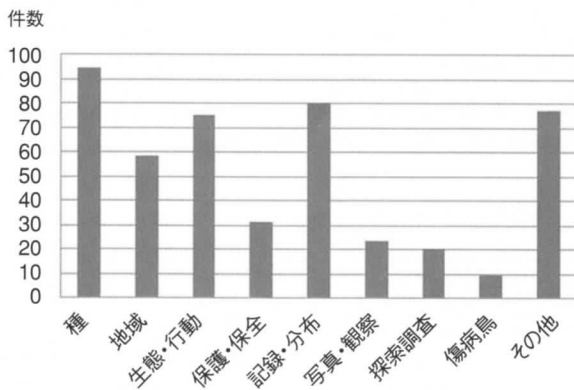


図4 キーワードによる分類

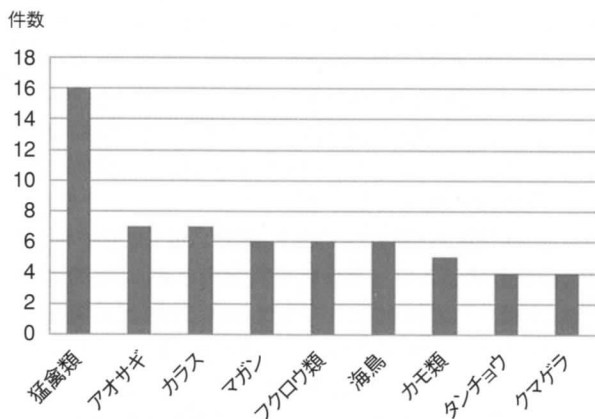


図5 テーマに多い鳥

(図5)。特に猛禽類は人気があり、生態系ピラミッドの視点から、および環境調査等の対象種とされているなどから関心度が高いとかがえます。その他、マガン、タンチョウ、クマガラ、フクロウ類の希少種においても好調で参加者も多く集ります。また、これらを含めて取り上げられた鳥は46種(類)に上り(表1)、その他アホウドリ、トキ、エゾライチョウ、ウズラなどの希少種その他、ウミネコ、ヤブサメ、スズメなど、一般的な種についてもやや専門的ではあるものの、身近な種として分かりやすい話は格別に好評でありました。

記念講演会としては、100回記念、10周年記念、150回記念、200回記念、20周年記念と行いましたが、どれも第一線の先生方をボランティアの「只!」でお呼びしたというのも“この会ならではの”といえるものです。いずれにしても、こうした貴重な話は可能な限り掘り起してとりまとめていきたいと思っています。

なお、お勉強会と一緒にはじめた柳沢先生の「中国のトキ事情」(第113回1996.11)の話は印象的でした。当時、日本産トキが1羽(ミドリ)となってしまうところで、人工増殖を図るという取組みが行われる中、野生トキが確認されたという中国中央部にある陝西省洋県に、(財)日本鳥類保護連盟の中国トキ保護視察団として訪ねられた時の状況報告や感情話でした。「人とのかわりの中でどう鳥と付き合っていけばいいか」という取組みや具体的事例を示しつつ、自ら体験を通じた貴重なお話は有意義なものでした。今では、それらを踏まえながら、我が国も佐渡トキ保護センターで増殖に成功し数を増やしている現状に繋がっていることはまさに感慨するものです。

こうしてみると、お勉強会は一般的に生きものの保全や取組みに繋がる先進的かつアカデミックな話題が数多くみられ、真剣で真面目な講師陣にも恵まれてここまで来れたことに驚かされます。

表1 テーマの鳥種(類)

アホウドリ	チゴハヤブサ	クマガラ
コシジロウミツバメ	ワシタカ類	アカゲラ
アオサギ	エゾライチョウ	シヨウドウツバメ
サギ類	ウズラ	ツバメ
トキ	タンチョウ	イワツバメ
マガン	ツル類	ハクセキレイ
オオハクチョウ	シギ・チドリ類	ピンズイ
ガンカモ類	オオセグロカモメ	(カラフトピンズイ)
ミサゴ	ウミネコ	ヤブサメ
オジロワシ	ウトウ	ウグイス
オオタカ	ツツドリ	スズメ
ハイタカ	シマフクロウ	ムクドリ
ノスリ	リュウキュウコノハズク	ハシボソガラス
サシバ	オオコノハズク	ハシブトガラス
チュウヒ	フクロウ	
シロハヤブサ	ヤマセミ	46種類

おわりに

鳥と人とお話、そして少しだけ？お酒の好きな方々の集うお勉強会ですが、何より愛護会の皆さんのお気持ちのあったことを知ることができました。ここまで続けているのは皆さんの多大なるご協力の賜があつてと感謝いたします。

昨年度、お勉強会はサントリー世界愛鳥基金の「地域愛鳥活動助成」を受け、「もっと野鳥を語り関心を広めたい！会活動の環境整備とホームページ作成」に取り組み、欲しかったプロジェクターの入手とブログ公開にこぎつけることができました。これで世間からも少しは認められる会になったと、“肩の荷が降りたという気持ち”と言いたいのですが、私を含む周りの関係者も高齢の仲間入りということで、後継者不足に悩むといわざるを得ません。

“継続は力なり”とはいいますが、いつの間に今年25周年

(四半世紀)、そして来年は300回開催を迎えることになります。何とか“記念開催を行わねば・・・”と気持ちばかりが逸るところですが、この会こそ“会活動の再確認”を自ら胸に抱き、“これまで通り無理せずにし進めるしかない”と思っている次第です。今後も無理せずのご参加はもとより、ご指導ご協力の程よろしくお願いいたします。

野鳥お勉強会

開催日時：毎月第三土曜日（原則）18:00～

開催場所：鳥太郎 大通店

札幌市中央区大通西5丁目昭和ビル地下1階

問い合わせ：野鳥お勉強会 代表 富川 徹

E-mail:tomikawa@toriben.org/

homepage:http://www.toriben.org/

## ワキアカツグミ 観察記録

札幌市西区 渡 邊 智 子

日本では大変珍鳥とされるワキアカツグミ（スズメ目ツグミ科、学名 *Turdus iliacus*、英名 Redwing）をじっくり観察・写真撮影もできましたので、ご報告致します。

観察日時は2011年1月10日の13時15分から30分頃までの、たった15分間。次の日にはもう観察出来ませんでした。観察場所は札幌市西区宮の沢の、多数人が行き交う、なんと宮の沢地下鉄駅近くという場所。

昨年から今年にかけての冬は、例年なら札幌市西区では、1週間程しか滞在しないレンジャク達が珍しく長逗留で、12月末から2ヶ月近くも観察出来るという不思議な年でしたが、そのレンジャク達が主にその時期好んで採餌するナナカマドが、長逗留の、しかもピーク時には千単位のレンジャク達に殆ど食い尽くされ、やっと残った実が、この宮の沢地下鉄駅近くにだけあったので、レンジャク達も、人が行き交う場所に集中していた時期でした。

このワキアカツグミも、レンジャクの仲間同様、ナナカマドの実が好物のようで、このレンジャク達と一緒に行動していました。といいましても、周りにキレンジャクが主になっている300羽程のレンジャク群がいたのですが、レンジャクと常に一緒に行動というわけではなく、そのレンジャク達の採餌の合間にナナカマドを単独で採餌し、時折採餌樹を離れ、近くの樹に止り、また同じ樹に戻るを繰り返していました。そんな単独行動から、大変目立ち、私も、随分単独行動のツグミが1羽だけいるな？と、思い見ると、あららら、これはツグミじゃないわ、ワキアカツグミじゃないの…と、見つけたわけです。

さて、私がワキアカツグミだと同定した根拠は、脇から翼の下面の雨覆部分に赤褐色があり、ツグミには無い特徴がはっきり見えたことからでした。また、喉から胸、脇に

は、暗褐色の縦縞斑があり、ツグミの鱗状のものとは違いました。それと、背中もグレーに一樣でそれもツグミのものとは違ったので、ワキアカツグミと判断しました。

文献によると大きさは、ツグミよりも3cm程小さいということでしたが、それは感じず、また眉斑の白が目立つということでしたが、この個体は薄い褐色を帯び、また脇の赤もそう大きくありませんでした。ツグミは用心深いことで知られていますが、ワキアカツグミはそうではなく、人を恐れない様子で、人通りの激しい道にも関わらず、また、私が大変近くで撮影しても全くそれには無頓着でした。

本種は、トルコの国鳥にもなっている野鳥で、アイスランドやスカンジナビア、ロシア極東で繁殖、冬期はヨーロッパ中部から南部、アフリカ北部、中央アジアで普通は越冬する種です。日本では迷鳥とし、過去北海道、千葉県、山口県、沖縄県などで記録があると聞いています。本道ではこれまでに5例ほどありますが、札幌近郊では1995年2月の豊平区羊ヶ丘での記録に次いで2例目になるようです。



ワキアカツグミ 2011. 1. 10 札幌市西区宮の沢

## 平成23年度 総 会 報 告

日 時：平成23年4月11日(月) 午後6時30分～8時00分  
 場 所：かでの2・7 320会議室  
 小堀煌治会長の挨拶のあと、議長に戸津高保氏を選出し、議案審議が行われ、原案どおり可決、承認された。

〈議 事〉

1. 平成22年度事業報告

[総 務]

(1) 野鳥写真展の開催

開催期間：平成22年4月27日(火)～5月9日(日)  
 開催場所：カメラの光映堂フォトギャラリー  
 出 展：14名、24点

(2) 「野鳥だより」の発送 (160号～163号)

(3) 野幌森林公園自然ふれあい交流館写真展

開催期間：平成22年6月1日(月)～6月30日(火)  
 出 展：14名、24点

(4) 新年野鳥講演会、野鳥写真映写会の開催

日 時：平成23年1月8日(土)、13:30～16:30  
 場 所：札幌市男女共同参画センター 4階大研修室  
 講 師：川路則友氏 (森林総合研究所北海道支所)  
 演 題：札幌の森林の中でヤブに潜む小鳥の繁殖事情  
 参加者：75名 (野鳥写真提供者3名)

(5) 北海道野鳥愛護会名入りカレンダーの作成・販売 (80部)

(6) 定例幹事会の開催 (各月1回、計12回)

(7) 傷害保険の更新

## 平成22年度 決 算 書

(収入の部)

項 目	予 算	決 算	増 減	備 考
個人会費	500,000	532,000	32,000	前納、後納を含む
家族会費	100,000	126,000	26,000	
団体会費	15,000	10,000	▲5,000	
事業収入	65,000	42,770	▲22,230	参加費、売上金他
雑 収 入	15,494	4,064	▲11,430	利息他
寄 付 金	10,000	53,513	43,513	個人寄付他
小 計	705,494	768,347	62,853	
繰 越 金	204,506	204,506	0	
合 計	910,000	972,853	62,853	

(支出の部)

項 目	予 算	決 算	増 減	備 考
印 刷 費	480,000	446,640	▲33,360	野鳥だより、封筒印刷費
通 信 費	110,000	107,376	▲2,624	野鳥だより郵送費他
会 議 費	46,000	51,100	5,100	幹事会会場費(前納分含)他
消耗品費	52,000	10,463	▲41,537	事務用品費他
交 通 費	16,000	13,000	▲3,000	野鳥だより発送業務
報 償 費	55,000	55,000	0	事務所費用、講師謝礼
傷害保険費	16,000	15,700	▲300	保険料
雑 費	50,000	31,880	▲18,120	写真展費用他
予 備 費	85,000	0	▲85,000	
基金積立	0	0	0	
合 計	910,000	731,159	▲178,841	

972,853 (収入) - 731,159 (支出) = 241,694 (次年度へ繰越)

## 平成23年度 予 算 書

(収入の部)

項 目	本年度予算	前年度予算	増 減	備 考
個人会費	490,000	500,000	▲10,000	前納、後納を含む
家族会費	100,000	100,000	0	
団体会費	15,000	15,000	0	
事業収入	40,000	65,000	▲25,000	参加費、売上金他
雑 収 入	3,306	15,494	▲12,188	利息他
寄 付 金	10,000	10,000	0	
小 計	658,306	705,494	▲47,188	
繰 越 金	241,694	204,506	37,188	
合 計	900,000	910,000	▲10,000	

(支出の部)

項 目	本年度予算	前年度予算	増 減	備 考
印 刷 費	450,000	480,000	▲30,000	野鳥だより印刷費
通 信 費	110,000	110,000	0	野鳥だより郵送費他
会 議 費	40,000	46,000	▲6,000	幹事会、新年講演会
消耗品費	20,000	52,000	▲32,000	事務用品他
交 通 費	16,000	16,000	0	野鳥だより発送業務
報 償 費	55,000	55,000	0	事務所費用、講師謝礼
傷害保険費	16,000	16,000	0	保険料
雑 費	50,000	50,000	0	写真展費用他
予 備 費	143,000	85,000	58,000	
基金積立	0	0	0	
合 計	900,000	910,000	▲10,000	

## 積立基金特別会計

(22年度収入決算)

項 目	金 額
繰 越 金	400,000
一般会計より繰入	0
合 計	400,000

(23年度収入予算)

項 目	金 額
繰 越 金	400,000
一般会計より繰入	0
合 計	400,000

会 員 数

	19. 4. 1	20. 4. 1	21. 4. 1	22. 4. 1	23. 4. 1
個人	316	286	271	260	255
家族	32	33	36	38	39
団体	2	2	2	3	3

[広 報]

- (1) 「北海道野鳥だより」160号～163号の発行
- (2) ホームページの維持・運営

[探 鳥]

- (1) 探鳥会26回 (1回平均32名)

[会 計]

- (1) 平成22年度決算報告
- (2) 平成22年度会計監査報告  
蒲澤鉄太郎、村野紀雄監事から適正に処理されている旨の報告があった。

2. 平成23年度事業計画

[総 務]

- (1) 野鳥写真展の開催  
開催場所：カメラの光映堂フォトギャラリー  
開催期間：平成23年5月10日(火)～5月22日(日)
- (2) 「北海道野鳥だより」の発送 (164号～167号)
- (3) 野幌森林公園自然ふれあい交流館写真展  
開催期間：平成23年6月1日(水)～6月30日(木)
- (4) 新年野鳥講演会、野鳥写真映写会の開催  
平成24年1月予定
- (5) 愛護会名入りカレンダーの作成・販売 (80部)
- (6) 定例幹事会の開催 (各月1回、計12回)
- (7) 傷害保険の更新

[広 報]

- (1) 「北海道野鳥だより」164号～167号の発行
- (2) ホームページの維持・運営

[探 鳥]

- (1) 探鳥会27回 (宿泊探鳥会を含む)

[会 計]

- (1) 平成23年度予算 (案)

[その他]

- (1) 当会の今後を考え、会員増加対策や探鳥会のあり方などをフリートークで議論した。

[役員人事]

谷口一芳顧問が退任した。副会長に樋口孝城幹事が就任し、広報幹事代表兼務となった。岩崎孝博幹事に代わり、畑正輔幹事が総務幹事代表になった。坂井伍一会員が新たに総務幹事に加わり、探鳥幹事を兼務することになった。

[平成23年度役員]

顧 問 藤巻 裕蔵、井上 公雄  
会 長 小堀 煌治  
副 会 長 戸津 高保、樋口 孝城  
監 事 蒲澤鉄太郎、村野 紀雄  
会計幹事 清水 朋子、横山 加奈子  
代表幹事 白澤 昌彦

幹 事

(総務)◎畑 正輔、栗林 宏三(兼)、坂井 伍一、  
佐藤ひろみ(兼)、品川 睦生、竹内 強、  
中正 憲信(兼)、岩崎 孝博、松原 寛直、  
横山加奈子(兼)、  
(探鳥)◎中正 憲信、梅木 賢俊、門村 徳男、  
栗林 宏三、後藤 義民、坂井 伍一(兼)、  
佐藤ひろみ、田中 陽、富川 徹、  
成澤 里美、早坂 泰夫、松原 寛直(兼)、  
鷲田 善幸  
(広報)◎樋口 孝城(兼)、岩崎 孝博(兼)、北山 政人、  
白澤 昌彦(兼)、高橋 良直、武沢 和義、  
道場 優、戸津 高保(兼)、道川富美子  
(◎印は各担当の代表者)



野幌森林公園

2011. 2. 6

【記録された鳥】トビ、フクロウ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヒヨドリ、キクイタダキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、ウソ、シメ、ハシブトガラス 以上16種

【参加者】秋山洋子、井上詳子、今村浩史、内山純一・雅子、太田敏枝、生越武子、樺沢美栄子、栗林宏三、源田トシ子、後藤義民、小西美美枝、坂井伍一、斉藤(ゆ)、佐野幸子、品川睦生、白澤昌彦、高橋きよ子、田中志司子、道場 優、戸津高保、中正憲信・弘子、野田貴代子、畑 正輔、早坂泰夫、浜野チエ子、広木朋子、辺見敦子、松原寛直・敏子、山本昌子、横山加奈子、吉田慶子 合計34名

【担当幹事】畑 正輔、松原寛直

円山公園

2011. 3. 6

札幌市中央区 白澤 昌彦

雪解けがどんどん進みだす円山の探鳥会は、いつも何となくウキウキする。特に天気が穏やかだと鳥たちの鳴声も違って聞こえる。

スタート地点の管理事務所前では、カワラヒワが特徴ある鳴声で、「春が来てるよー」と鳴いているようである。風もなく、ほんのり温かい日差しの中を出発。今週半ばの大雪で池はほんの僅かしか空いておらず、その狭い所でマガモが10羽ほどいる。開拓神社の餌台にはカラ類が飛び回っている。いつもの光景で双眼鏡で近くからの観察である。梅林の方に行くが、お目当てのウソはさっぱりで、私は結局この日、ウソは鳴声だけで姿を見ることが出来なかった。ちょうど1ヶ月前に野幌探鳥会があったが、野幌はハシブトガラが頻繁に出るが、円山はシジュウカラ、ヒガラ、ヤマガラが多く、八十八箇所に入って初めてハシブトガラを見ることができた。この頃のハシブトガラはチヨ、チヨ、



チヨと可愛らしい声で鳴いて、春の到来を感じさせてくれて大好きである。前日に藻岩山の北斜面を登ったが、カラ類の混群にシジュウカラはいなかった。シジュウカラはやはり都市鳥なのか、はたまた川沿いに数箇所で見つけられているそのせいなのだろうか。餌付けが気になるところである。

本日のトビックスは、何と言ってもイスカの30羽ほどの群れが見られたことだと思います。もう少しじっくりと見たかったです。

【記録された鳥】トビ、マガモ、アカゲラ、コゲラ、ヒヨドリ、ツグミ、キクイタダキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、カワラヒワ、マヒワ、イスカ、ウソ、シメ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト 以上22種

【参加者】秋山洋子、板田孝弘、井上公雄、井上詳子、今村三枝子、内山英晋、オクシマ、景安則子、北川博一、栗林宏三、坂井伍一・俊子、佐野幸子、品川睦生、白澤昌彦、高橋きよ子、高橋良直、武沢和義、タケナガマサコ、立田節子、田中志司子、田辺 至、谷口勇五郎、土田 愛、戸津高保、中正憲信・弘子、西尾京子、畑 正輔、浜野チエ子、樋口孝城・陽子、広木朋子、辺見敦子、山下富雄、山田甚一、吉田慶子 以上37名

【担当幹事】白澤昌彦、武沢和義

**ウ ト ナ イ 湖**  
2011. 3. 20

【記録された鳥】ダイサギ、アオサギ、トビ、オジロワシ、オオワシ、コブハクチョウ、オオハクチョウ、ヒシクイ、マガン、マガモ、ヒドリガモ、ヨシガモ、オナガガモ、ホオジロガモ、ミコアイサ、カワアイサ、シロカモメ、キジバト、コゲラ、アカゲラ、ヒヨドリ、シロハラ、ハシブトガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、アトリ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト 以上30種

【参加者】阿部真美、白田 正、北山政人、小堀煌治、小山久一、坂井伍一・俊子、品川睦生、高橋良直、竹田芳範、田中 陽・雅子、中正憲信、蓮井 肇、樋口孝城・陽子、畑 正輔、松尾博幸、松原寛直・敏子、横山加奈子、鷺田善幸 以上22名

【担当幹事】品川睦生、鷺田善幸

**モ エ レ 沼**  
2011. 4. 10  
札幌市清田区 内木 克巳

野鳥愛護会に参加させていただいて3年になりますが、まだまだ参加の回数が少ないため、いつまでたっても鳥の識別どころか、どこに止まっているのかも分からない有様です。モエレ沼が今シーズン初めての探鳥会とあって、朝からソワソワ、ワクワクで、今日はどんな鳥に出会えるのかなと、期待に胸を膨らませて夫婦で張り切ってモエレ沼公園に出かけました。

昨年モエレ沼は、晴れにも関わらず強い風で寒さに震えていたことを思い出し、今回は完全武装の冬支度で望み

ました。今年は例年に比べ雪解けが遅いようで、遊歩道の両側には雪が残り、歩く道を選んでの行程で、沼の水面にも多くの氷が残り、いつもの景色とは違っていましたが、お天気は良く、気温も暖かで風も少ない最高の鳥見日和でした。

参加者も50~60人と大変盛況で、いつもながら和気藹藹の探鳥会でしたが、私の方は相変わらずのキョロキョロ、ドタバタの繰り返しで、中々皆鳥を見つかることができませんでした。そんな中、ベテランの方が遠くの一点にスコープを合せ『入っていますよ。どうぞ』と声を掛けて下さり、イスカやオオバン等私にとって初めて目にする鳥との出会いや、氷の上に止まるオジロワシの珍しい姿が見られることができたので、本当に楽しい一日でした。

いつもこの探鳥会に参加して感じるのは、何とも言えぬ心地の良い時間を過ごせることですが、これも一重に幹事さん達の心配りと会員の皆様方の暖かい雰囲気から生まれてくるのだと感謝しています。いつかは私も『入っていますよ。どうぞ』と皆様方に言えるようになりたいと思っています。

【記録された鳥】カワウ、アオサギ、トビ、オジロワシ、ヒドリガモ、マガモ、コガモ、オナガガモ、ハシビロガモ、キンクロハジロ、ミコアイサ、カワアイサ、オオバン、カモメ、キジバト、ヒバリ、ハクセキレイ、ツグミ、キクイタダキ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、オオジュリン、カワラヒワ、マヒワ、ベニマシコ、イスカ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト 以上31種

【参加者】東さやか、阿部真美、荒木良一、井上公雄、今泉秀吉、今村三枝子、白田 正、内山英晋、梅原 進、岡本健太郎、北山政人、栗林宏三、後藤義民、小西峰夫・美美枝、斎藤敦子・夢、坂井伍一・俊子、坂口、品川睦生、島田芳郎・陽子、高田征男、高橋良直、竹田芳範、田中 陽・雅子、塚原真弓、道場 優・信子、戸津高保、内木克巳・靖子、中嶋慶子、中正憲信・弘子、中田勝義、長田秀行、浪田良三、長谷川 功・伊都子、畑 正輔、早坂泰夫・みどり、浜野チエ子、原 美保、樋口孝城、廣岡 尚、松原寛直・敏子、道川富美子、山田 勉・裕子、山本和昭、横山加奈子、吉川茂子、吉田慶子、吉中宏太郎・久子 以上60名

【担当幹事】北山政人、樋口孝城

**宮 島 沼**  
2011. 4. 17  
札幌市北区 たなか よう

10時開始の探鳥会でしたが2時間半前に家を出発。国道275は昨夜からの降雪で一面真っ白な銀世界。田畑の中のものも白鳥なのか雪なのか識別困難。春4月後半と言うのにみぞれ混じりの雪の中一路宮島沼へ。

前週日曜の下見の段階で沼の結氷8割以上確認、沼面の氷の解ける「沼明け」は4月18日(月)と当初予定されていました。今年は例年の観察場所で沼に張り出した堤までの進入不可、手前に鉄柵があり告知板に鳥インフルエンザ防止の為、進入禁止の表示あり。何処で観察可能かと周囲を確認。沼センター建物の右側に観察小屋とその手前に数

メートル横に延びた木製の観察用壁（観察窓付）が設置されていました。この2箇所が観察に適当な場所の様でした。

当日集合幹事で話し合い結局、沼センター建物沼側のテラス部（庇あり）と先述の鉄柵の前の双方で観察することになりました。気温が低いので暖をとりながらの人はテラスの方で、若い方あるいは忍耐強い？年配の方や何人かの幹事は鉄柵で観察をしました。

会の冒頭、沼センターのレンジャーの方からの説明で4月12日（火）には予定より早く沼明けになり現在約6万6千羽のマガンが飛来していますとの事。私たちの観察が始まる頃には採餌で鳥たちの多くは居らず、沼は数十から百羽単位の鳥たちがいました。沼側ではマガン、ヒシクイ、オナガガモ、ミコアイサ、オジロワシなどを確認。岸右側で「オオジュリンが数十羽いるぞー！」の声に何人か観察小屋の方へ向かう。「オオジュリンの大群は見たこと無い！」それっ！と走り勇んで行った私が小屋に着いた頃には後の祭り、2,3羽だけでした、ガックリ意気消沈。そこにはムクドリやシジュウカラ、カワラヒワもいました。

かなりの低温とみぞれ混じりの雪、そして観察器具が思うように使えずいつもより短時間（1時間少々観察）で終了となりました。それでも確認は全26種で例年並みの種数となりました。沼センターの女性事務員さんからチェックリストを参考にしたいので見せてくださいとのリクエストがあり開示しました。

それにしてもあの鉄柵は観察にはとても難儀しました。悪天候で足元が悪く、柵が死角になったりで方向が限られ観察しづらい事この上なし。それでも、鳥インフルエンザに罹患することを考えると贅沢も言えませんね。また、あの木製の観察用の壁も会員の女性が何人か試していました。観察窓が上下二箇所ずつ幾つかあり、下方が低い位置にあり過ぎて覗きづらく上方は高過ぎてあまり実用的ではないとお小言を頂戴いたしました。（私が考案したものではありませんが）申し訳ありませんでした。

鳥インフルエンザの動向は最近メディアにあまり出ていないように思いますが終息はいつの見込み？いったいどうなっているのでしょうか？……………。

【記録された鳥】カイツブリ、カワウ、アオサギ、トビ、オジロワシ、オオハクチョウ、コハクチョウ、ヒシクイ、マガン、カルガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、ハシビロガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、ミコアイサ、カワアイサ、オオセグロカモメ、ヒバリ、シジュウカラ、オオジュリン、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス  
以上26種

【参加者】阿部真美、岡本健太郎、品川睦生、清水朋子、高橋良直、田中 陽・雅子、中正憲信・弘子、畑 正輔、浜野チエ子、早坂泰夫、原 美保  
以上13名

【担当幹事】田中 陽、畑 正輔

## 野幌森林公園

2011. 4. 24

札幌市白石区 秋山 洋子

野幌の森は昔から思い出深い公園です。子供をつれて、お弁当を持ってハイキングや、少し大きくなるとキャンプと、

子育て時代は忙しくて周りの飛び交う鳥を見ることができませんでした。子育ても終わり、何年か前から一人でカメラをぶら下げて森の中の散策を始めました。鳥の声や木々のざわめきの中にゆっくり見上げると、そこにいろんな動物たちとの出会いがありました。そこで出会った人たちに鳥の名前や習性を少し教えてもらって、札幌ってすごい、街のこんな近くに原始の森がある。インターネットで鳥の名前を調べているうちに、会の存在を知りました。

自由参加で申し込みもいらぬということで、どんなものかとドキドキしながら参加させていただきました。昨日からは雨、天気予報では日中は晴れてくるはず。日当たりの悪いところはまだ残雪があり、昨日からの雨で道もぬかるんでいました。これも普段運動不足の身にはきっと良い運動になるはず。

大沢口に入ってすぐヤマゲラ2羽がまるで私たちを迎えてくれたように木々の間を飛んでいました。足元には福寿草やザセンソウ。雪解けの水のせせらぎの音も春の訪れを知らせてくれていました。歩いているうちに空に青空が広がり、気温も上がってきたのか暖かくなり、一枚着ているものを脱ぐ人もいました。

30人位の参加だったでしょうか？「あそこにいるよ」と普段見つけることのできない鳥を教えてもらったり、鳥の鳴き声を教えてもらったり、2時間程の散策があつという間でした。帰りに「野鳥だより」をいただいて活動内容を読ませていただき、野鳥のことを知ったらもっと面白くなるのではと思います。

今回は楽しい時間を作っていただきありがとうございます。また参加させてください。よろしく願います。いつかヤマセミが見てみたいなどと思っています。

【記録された鳥】トビ、オオタカ、ノスリ、キジバト、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ヒヨドリ、クイタダキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、アオジ、カワラヒワ、ニューナイスズメ、ハシブトガラス  
以上21種

【参加者】秋山洋子、井上公雄、今村三枝子、大坂博記、岡本健太郎、川東保憲・知子、栗林宏三、後藤義民、小西美美枝、小堀煌治、小山久一、今 善三郎、坂井伍一、清水朋子、竹田芳範、辻 雅司・方子、内木克巳、中田勝義、中正憲信・弘子、浪田良三、畑 正輔、早坂泰夫、広木朋子、辺見敦子、村上茂夫、山本昌子、横山加奈子、吉田慶子  
以上31名

【担当幹事】後藤義民、横山加奈子

## 藤 の 沢

2011. 5. 5

札幌市東区 土田 愛

5月5日の南区・藤の沢の探鳥会に参加させていただきました。バーダーなら誰でも心が躍りだすGWです。小鳥のさえずりが多すぎて何がいるかもわからないのでは、などといらぬ心配までして向かいましたが、結果としては到来がまだのようで鳥見の成果はいまひとつ…ガックリしなかったといえは嘘になりますが、しかし、その代わりに私の前を歩くご婦人の方の山野草・花についての会話が大変勉強

強になりました。

普段は一人での鳥見なので、散策中に何か見慣れない花(大体は見慣れないですが…)が咲いているなど思ってもわからないままにしまいます。今回観察できたエゾエンゴサク・ヒトリシズカ・エンレイソウ・フクジュソウはせっかく覚えたので、忘れないようにしたいと思います。みなさん、草木を含め自然をゆったり楽しみながら野鳥観察をされていて、始めて間もない私はとにかく見たことのない鳥を見たいという欲求が強くて、まだその境地に至ることは出来ないかもしれませんが、徐々にでも近づければなあとしみじみ感じました。

【記録された鳥】 マガモ、キジバト、コゲラ、アカゲラ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、モズ、コマドリ、ヤブサメ、ウグイス、センダイムシクイ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、キバシリ、ホオジロ、アオジ、カワラヒワ、ウソ、ニュウナイスズメ、ハシブトガラス 以上23種

【参加者】 秋本秀人、五十嵐加代子、板田孝弘、大阪博紀、北川博一、栗林宏三、小西峰夫・芙美枝、小堀煌治、坂井伍一、坂口賢治・幸子、品川睦生、田川 実・ひろ子、土田 愛、戸津高保・以知子、中田勝義、畑 正輔、早坂泰夫、松原寛直・敏子 以上23名

【担当幹事】 栗林宏三、小堀煌治



【根室】

2011年7月2日(土)～3日(日)の宿泊探鳥会です。案内は前号(第163号)をご覧ください。事前申し込み制で、定員は既に満たされています。

【野幌森林公園】 2011年7月10日(日)、9月4日(日)

野幌森林公園も7月と9月とではそれぞれに異なる趣きがあります。大沢園地で昼食をとり、大沢口に戻るのは午後1時頃になります。

集合：野幌森林公園大沢口 午前9時  
交通：JR新札幌駅発、夕鉄バス「大沢公園入口」下車、JRバス「文京台南町」下車 徒歩各6分

【石狩川河口】 2011年8月21日(日)、9月18日(日)

秋の渡りシーズンの前半と後半に石狩浜・河口で主にシギ・チドリ類を楽しみます。はまなすの丘公園ビジターセンターの前から浜に出て河口まで、河口からは石狩川に沿って戻ります。全部で4km弱の行程になります。正午近くに駐車場に戻ってから鳥合わせをし、センター内など

で自由に昼食をとることになります。

集合：ビジターセンター駐車場 午前9時30分  
交通：札幌駅発中央バス7番石狩行  
終点「石狩」下車、徒歩20分

【鶴川河口】 2011年8月28日(日)

鶴川河口付近の自然干潟や人工干潟でのシギ・チドリ類の観察が主目的です。当日の天候次第ですが、人工干潟付近で鳥合わせをし、自由解散となります。「四季の館」に戻って館内ロビーで昼食をとられる方々が大半です。館内には食堂や売店もあります。

集合：鶴川温泉「四季の館」駐車場 午前9時30分  
交通：札幌駅または地下鉄大谷地駅発、道南バス浦河行(ペガサス号)「四季の館」前下車

☆いずれの探鳥会も悪天候でない限り行います。

☆昼食、雨具、筆記用具をお持ち下さい。

☆問い合わせ 北海道自然保護協会 011-251-5465  
午前10時～午後4時(土・日祭日を除く)

## 鳥民だより

◆平成23年度野鳥写真展出展者・作品◆

- 荒木 良一 バン、クイナ
- 内山 純一 ヤブサメ
- 漆崎 修 モズ、ミサゴ
- 小堀 煌治 イワツバメ、キレンジャク
- 佐伯 武美 キレンジャク、ナキイスカ
- 坂井 伍一 イスカ、ヨシガモ
- 佐藤ひろみ ミソサザイ、コミミズク
- 品川 睦生 ヤマセミ、マミチャジナイ
- 新城 久 サシバ、ハイタカ
- 高橋 良直 オグロシギ、コミミズク
- 田中 陽 ヤマシギ、ホシガラス
- 田向 一彦 アカショウビン、タンチョウ
- 富川 徹 アカアシショウゲンボウ、コミミズク
- 中正 憲信 エトペリカ、ケイマフリ
- 浜野チエ子 アカゲラ、ノビタキ
- 道川富美子 センダイムシクイ、ベニマシコ
- 吉中宏太郎 ケイマフリ

以上17名 32点

【新しく会員になられた方々】

- 長田 秀行 (札幌市北区)
- 内山 英普 (小樽市)
- 土田 愛 (札幌市東区)

【北海道野鳥愛護会】 年会費 個人2,000円、家族3,000円(会計年度4月より)

郵便振替 02710-5-18287

〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・6階 北海道自然保護協会気付 ☎(011)251-5465  
HPのアドレス <http://homepage2.nifty.com/aigokai/>